

今日における日本天台宗の辿って来た歴史を考察していく上で、円珍をトップとして掲げる寺門派と、それに対して円仁を祖と立てる山門派の関係は、注目されている論点の一つである。この二派の分裂における問題に焦点を当てるとき、円仁と円珍の人物像や関係性に焦点を当てることは重要なことである。しかし、円仁と円珍の関係だけが、山門派と寺門派への分裂に繋がったとは言いがたい。最澄が没した後から円仁や円珍が活躍するまでの間は、最澄の直弟子たちが活躍している時期である。直弟子としては、初代天台座主である義真や第二代天台座主である円澄、『伝述一心戒文』を作成した光定などがあげられる。この時期は、最澄の直弟子たちが、一枚岩でなかったと考えられる文章が、『伝述一心戒文』に記されている。そのため、円仁や円珍の時期から山門派と寺門派の分裂が始まったのではなく、義真や円澄など最澄の直弟子たちの活躍する時期から、二派の分裂につながる要因があったのではないかと推測する。そこから、この二人よりも前からつまり最澄やその直弟子たちが活躍する時期に注目して、彼らの間にどのような関係性が築かれていたのかを十分に検討していく必要があると考える。特に、最澄が亡くなった後に、日本天台宗を率いた第一代天台座主である義真やその後継として第二代座主に就任した円澄の関係性について、未だ不透明な部分も多い。ゆえに、本論では、最澄の直弟子たちがどのような関係であったのかについて、最澄の直弟子の一人である光定が記した『伝述一心戒文』を中心に明らかにしていく。

第一章では、義真が亡くなった天長一〇年(八三三)七月四日以降に、円修と円澄を中心に次期第二代天台座主の就任をめぐる問題に注目した。この問題に関して、小野勝年氏をはじめとした様々な研究者が言及してきた。しかし、先行論文を一つ一つ検証していくと、史料を混同して解釈していることが判明した。また、研究者が執筆した以前の論文について、検証を十分に行っていないといった問題点が浮き彫りになったことを述べていく。

第二章では、『伝述一心戒文』巻中の「十 菩薩僧位次官符達」¹⁾ 天長皇帝「申下文」²⁾を読み解いていくことで、最澄の僧次に対する考え方について考察していく。これは、第一章で取り上げた義真没後の座主の問題において、光定が円澄を支持した理由として、義真と円澄の関係性を指摘したからだ。この二人は、円澄が義真よりも年上であり、最澄の門弟となったのも円澄が先である。それにもかかわらず、最澄が後継者としたのは、義真だった。最澄は、義真を上臈、円澄を下臈と定めており、これは、最澄の僧次に対する考え方からくるものである。よって、『伝述一心戒文』巻中の「十 菩薩僧位次官符達」¹⁾ 天長皇帝「申下文」²⁾から、本来の僧次は、具足戒を受戒した日から数えていくのに対して、日

本天台宗の僧次は、大乘戒を受戒した日を基準としていることが判明した。これは、最澄が大乘戒を重要視することに起因していると思われられる。また、最澄は、日本における大乘戒の正式な受戒は、大乘戒壇で行われるものと考えていたと推測する。

第三章では、第二章において考察した最澄の僧次に関する考えを基盤として、なぜ義真が上臈、円澄が下臈であると位置付けられたのかを明らかにしていく。そのため、義真と円澄が、具足戒と大乘戒を正式な受戒制度に則って受戒したと受け取れる年月日はいつかを細かく調べていった。義真は、具足戒を延暦二三年（八〇四）二月七日、大乘戒を延暦二四年（八〇五）三月二日に受戒している。義真の受戒日については、『顕戒論縁起』に公験が記されている。それに対して、円澄の受戒日は複数史料から読み取れた。具足戒の受戒日は、『続日本後紀』延暦二四年（八〇五）四月と『本朝高僧伝』延暦二三年四月で一年異なる。また、菩薩戒を受戒した日も延暦一七年（七九八）より前、大同元年（八〇六）十一月、弘仁一四年（八二三）四月一四日の三度が確認されている。そのため、義真と円澄の具足戒と大乘戒の受戒した日を組み合わせ、それぞれ二人の僧次がどのようになるか検証していく。これにより、義真と円澄の僧次における上下関係は、最澄の僧次に対する考えや大乘戒壇設立の構想が念頭に置かれていることが推測される。ゆえに、最澄が亡くなる弘仁一三（八二二）六月四日まで、最澄は、義真を具足戒と大乘戒を受けた菩薩僧、円澄を具足戒のみを受戒した声聞僧と見なしており、義真は上臈、円澄は下臈に据えたと考えられる。

本論において、最澄の直弟子たちがどのような関係を築いていたのかを考察するために、主な史料として『伝述一心戒文』を使用しながら、初期日本天台宗の動向を検討した。弟子の間における騒動として目を引くのが、義真が亡くなった天長一〇年（八三三）七月四日以降に、円修と円澄を中心に次期座主をめぐる問題だった。これに関して、様々な研究者が言及してきたが、史料を混同して解釈していることや、先行研究の検証を十分に行っていないといった問題点が浮き彫りになった。

『伝述一心戒文』において、義真没後の座主の問題に言及する際、光定は義真と円澄の関係性を指摘した。最澄は、義真を上臈、円澄を下臈と定めており、それは最澄の僧次に對する考え方からくるものであった。このことは、『伝述一心戒文』巻中の「十 菩薩僧位次官官符達」天長皇帝「申下文」に明らかにされている。この文章から、本来の僧次は、具足戒を受戒した日から数えていくのに対して、日本天台宗の僧次は、大乘戒を受戒した日を基準としていることが判明した。これは、最澄が大乘戒を重要視することに起因していると思われられる。また、最澄は、日本における大乘戒の正式な受戒は、大乘戒壇で行われるべきものと考えられた。そこから、義真と円澄の僧次を検討していくと、最澄が亡くなる弘仁一三年（八二二）六月四日までに、義真は唐の国清寺において大乘菩薩戒を受けたのに対して、円澄は具足戒のみ受戒していたことになる。そのため、義真が上臈、円澄が下臈と位置づけられたと考える。